

## ビバハウス便り NO.107 つくば市に続き、今度は和歌山

### からのお母さんの応援～最大のピンチを救って下さる

2015年7月31日 ビバハウス責任者 安達 俊子

先に発行した「ビバハウス便り」106号に掲載した「つくば市からのお母さん」の緊急応援に引き続き、和歌山からのお母さんが支援に来て下さった。お母さんとの出会いは、娘さんが北星余市高校卒業生で、在学中にビバに二人で訪問してくれたことがきっかけで今でも親交があり、今回ボランティアという形で約1ヶ月間、ご支援いただきました。本当にありがとうございました。

みんなのお母さんのような、優しいしゃべり口調で人を包み込む雰囲気、そして明るい笑い声、支援学校で約30年間、教員として働き培ったものなのだなあと深く感心させられました。

さて、人が人を呼ぶという言葉があるのは知っていたが、尚男が退院してビバハウスでの生活を再開し始めてからというもの、急に相談のメールや訪問者が多くなり、現在新規入所者が3件、他に1人が入所予定者としているので、安達尚男には今更ながら「人を呼ぶ力」があるのではと改めて思うようになった。

新メンバーは、男性2名・女性1名で、共に親と一緒にいると息がつかまってしまうという。親子という濃密な関係だからこそ起きてしまう弊害。そこから負のスパイラルが延々と続き、共にダメになってしまうという最悪の事態が3人を苦しめている。

T君(33歳)は大学卒業後、就職をしたが、休む日もなく毎日頑張り、疲れ果てて退職。その後引きこもり、親の勧めもありビバへ。明るく、話し方もしっかりしていて、なにより活発だ。気さくに他のメンバーとも話し、悩みを聞いてあげたりもしている。本当に悩みがあるのか？と自分を疑いたくなる時もある。しかしそういう人だからこそ見えない悩みを抱えて独り苦しんでいるのも確かだ。

Iさん(女性)は色々挑戦はしてみるけど長続きせず、その間で疲れてしまい、引きこもるといのがずっと続いていて、こちらも親の勧めでビバに入所。笑顔が素敵でその事を褒めたら、「そうしている方が楽だから。」という言葉にT君同様Iさんの抱えている苦しみの程を知った思いがした。今は、毎日食事作りや、洗濯物のお手伝いをしてくれ、本当に助かっている。これから2人ともアルバイトに挑戦する予定で、日々、気力・体力づくりを心掛けている所だ。